

釧路炭鉱の存続と 国内炭の再生にむけて

若松事業所のガス化炉

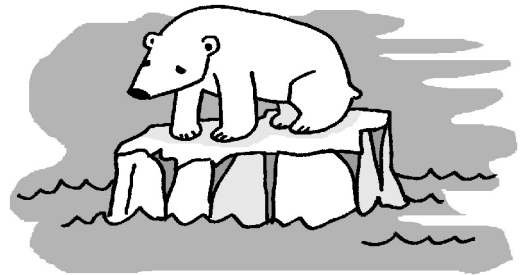


8月16日から19日まで、北九州市の電源開発若松総合事業所と春日市の九州大学炭素素材国際教育研究センターを石川明美議員とともに視察してきました。

石炭のガス化発電

石炭火力発電所は二酸化炭素を排出し、地球温暖化の原因。一般的にはこう考えられています。そこで、二酸化炭素の排出を抑制する新たな発電方式を開発することが必要です。

電源開発若松総合事業所では、石炭のガス化複合発電に取り組んでいます。高温・高圧化でガス化して燃焼効率を高め、蒸気タービンとガスタービンを併用します。二酸化炭素の排出量を大きく減らせる画期的技術です。また、石炭ガスから二酸化炭素を分離する技術にも取り組んでいます。将来、大変有望な技術です。



すでに、福島県いわき市では別の方式で、さらに大型のガス化発電を検証しています。電源開発も広島県に新たな実証プラントを建設中です。この技術が広まれば、地球温暖化を進めない石炭利用が現実のものになるのでしょうか。

石炭の未来は明るい、輸入頼みではダメ

九州大学に炭素資源国際教育研究センターが設立され、炭素資源の開発と有効利用、環境問題、エネルギー問題などの研究と人材育成などに組んでいます。様々な分野の先生からお話を伺いながら、石炭の将来性について意見交換をしました。

二酸化炭素の排出量は半減できます。発電段階での低減技術次第です。期待されているのが燃料電池なのですが、開発は遅れており、政治の責任です。ガス化に限って言えば、日本の技術は世界でもトップレベルにあります。

しかし、かなり高額なプラントになります。この技術を商業ベースで導入するには、日本の投資的余力が問題になります。釧路炭鉱の石炭は良質でガス化に向けた石炭です。

化石燃料の可採埋蔵量を考えると、長期的に有効可能なのは石炭です。自然エネルギーは将来は主役ですが、当面は石炭以外にはありません。アメリカ・中国などは、石炭は自給が可能なのに輸入を増やしています。国内炭を備蓄する方が一助に国内の炭鉱で石炭を掘れるようにしておくためです。

石油・天然ガスは価格はあがる一方であり、原発については万が一のリスクがあまりにも大きい。日本の石炭について、どのくらいの投資をすれば採炭を再開できるのか。そうしたシミュレーションをすべきです。おそらく、採炭が始まれば、価格的には国内炭は採算ラインに乗ると考えられます。

